# 日本漢詩研究概論

佐　藤　利　行

広島大学大学院文学研究科論集　第79巻（2019年12月）別刷

*THE HIROSHIMA UNIVERSITY STUDIES*
*GRADUATE SCHOOL OF LETTERS*

VOL. 79・DECEMBER 2019

# 日本漢詩研究概論

佐　藤　利　行

【キーワード】漢詩、漢字文化、文学表現、広島、原爆

## 一　はじめに

日本では、中国から漢字がもたらされるまでは、日本語を表記するための独自の文字を持っていなかった。すなわち伝達の手段としての日本語はあったが、それを記録するための文字を生み出す前に、中国から伝えられた漢字を日本語を表記するための文字として利用したのである。

記録によれば、３世紀頃、応神天皇（270～310在位）の時に百済の博士王仁によって『論語』や『千字文』といった書籍が日本に伝えられたということである。

『古事記』（中巻・応神天皇二十年己酉）には、次のように記されている。

> 又、科賜百済国、若有賢人者、貢上。故受命以貢上人、名和邇吉師。即論語十卷・千字文一卷、并十一卷、付是人即貢進。〔此和邇吉師者、文首等祖〕

又た、百済の国に、「若(も)し賢き人有らば、貢上(たてまつ)れ」と科(おほ)せ賜ふ。故に命を受けて以て貢上れる人、名は和邇吉師。即ち『論語』十卷・『千字文』一卷、并せて十一卷、是の人に付して即ち貢進(たてまつ)る。〔此の和邇吉師とは、文首等が祖なり〕

すなわち、「（天皇は）また百済国に『もし賢人がいるのであれば、献上せよ』と仰せになられた。それで、その命を受けて（百済が）献上した人は、名は和邇吉師(わにきし)という。『論語』十卷と『千字文』一卷、合わせて十一卷を、この人に附けて献上した。〔この和邇吉師が、文首(ふみのおびと)らの始祖である〕」というものである。

また『日本書紀』巻第十（応神紀）には、次のような記述がある。

> 十五年秋八月壬戌朔丁卯、百済王遣阿直岐、貢良馬二匹。即養於輕阪上厩。因以阿直岐令掌飼。故号其養馬之処曰厩阪也。阿直岐亦能読經典。即太子菟道稚郎子師焉。於是天皇問阿直岐曰、如勝汝博士亦有耶。対曰、有王仁者。是秀也。時遣上毛野君祖荒田別・巫別於百済、仍徵王仁也。其阿直岐者、阿直岐史之始祖也。

十六年春二月、王仁来之。則太子菟道稚郎子師之、習諸典籍於王仁、莫不通達。所謂王仁者、是書首等始祖也。

十五年の秋八月の壬戌の朔丁卯に、百済の王は阿直岐を遣はして、良馬二匹を貢る。即ち輕の阪上の厩に養はしむ。因りて阿直岐を以て掌り飼はしむ。故に其の馬を養ふの処を号して厩阪と曰ふなり。阿直岐は亦た能く經典を読めり。即ち太子菟道稚郎子、焉を師とす。是に於て天皇は阿直岐に問ひて曰く、「如し汝に勝れる博士、亦た有りや」と。対へて曰く、「王仁といふ者有り。是れ秀れたり」と。時に上毛野君の祖、荒田別・巫別を百済に遣はして、仍りて王仁を徴さしむ。其れ阿直岐なる者は、阿直岐史の始祖なり。

十六年の春二月に、王仁来たり。則ち太子菟道稚郎子は之を師とし、諸ろの典籍を王仁に習ひ、通達せざるは莫し。所謂王仁は、是れ書首等の始祖なり。

すなわち、「十五年の秋八月、壬戌朔の丁卯に、百済王は阿直岐を遣わして、良馬二匹を貢った。そこで、軽（現在の奈良県橿原市大軽町の辺り）の坂の上の厩で飼わせた。そうして阿直岐に任せて飼わせた。そのために、その馬を飼った所を名付けて厩坂というのである。阿直岐はまた経典をよく読んだ。それで、太子菟道稚郎子は、阿直岐を師とされた。ここに、〔応神〕天皇は阿直岐に問ねられた、「かりにお前に勝る学者は他にいるのか」と。（阿直岐は）お答えして言った、「王仁という者がおります。すぐれた人です」と。そこで上毛野君の先祖である荒田別と巫別を百済に遣わせ、王仁を召しださせた。その阿直岐なる者は、阿直岐史の始祖である。

十六年の春二月に、王仁は参上した。そこで菟道稚郎子は王仁を師とされ、もろもろの典籍を王仁から習われ、精通しないものは何もないようになった。いわゆる王仁は、書首らの始祖である」というものである。

こうして王仁によって漢籍が日本にもたらされたのである。初めて中国の文字に触れた日本人は、当初は恐らく何が書いてあるのか、まったく理解できなかったはずである。

しかし次第に、漢字の意味を理解できるようになっていった。例えば「山」という漢字は、中国人は「サン」と発音しているが、この漢字は当時の日本語であったやまと言葉の「やま」という意味であるようだ。「川」は「セン」と発音するが、これはやまと言葉の「かわ」を意味する字であるらしい。

このようにして、日本人は中国から伝来した漢字の意味を理解し、それを日本語を表記するための文字として活用したのである。中国の自然・風土は日本のそれとよく似ている。これは漢字の意味を理解する上で大いに役立ったと考えられる。「山」という漢字は、もともと象形文字であり、山の形を表したものであるが、これが自然環境の違うところであったとしたら、その意味を探るのは非常に難しかったであろう。

やがて日本人は、漢字を表音文字として活用し、平仮名・片仮名を生み出した。

もしも、中国から漢字が日本にもたらされるのが、もっともっと後の時代であったならば、日本人はいったいどのような文字を生み出していたのであろうか。それを想像するのも興味深い。

世界には、様々な文明があるが、３千年以上にわたり同じ文字を用いているのは、中国だけである。そうしてその漢字を自国の文字として取り込んでいった日本・韓国・朝鮮・台湾・ベトナムなど、いわゆる漢字文化圏は、中国の影響を大きく受けた。その影響は、文学の中にも色濃く表れている。

## 二　日本人が作った漢字（国字）

日本人が作ったとされる漢字、いわゆる国字の数は、一般に四百字とも五百字とも言われている。先にも述べたが、そもそも中国から漢字が将来された当初、例えば「山」という漢字は、当時の中国語の発音をまねて「サン」という音が与えられた。また、「山」という字はどうも日本語の「やま」を意味するらしいということから「山」という漢字に「やま」という訓（意味）が与えられた。こうして、漢字には音と訓とが備わったのである。しかし、国字は日本人によって創作されたものであるから、当然のことながら「訓」はあっても「音」は無い。今、思いつくままに国字を挙げると次のようなものがある。

峠　凪　畑　辻　凧　働　樫　柾　鰯　鱈

ただ、ここに挙げた「働」には「ドウ」という音が与えられたが、こうした例はむしろ稀である。最近では、こうした国字が中国でも使われるようになり、もともと音の無い漢字に音を与えようという動きもあるように聞いている。

さて、「国字」という語は、すでに新井白石（1657～1725）によって用いられている。白石の『同文通考』巻四に、次のようにあり、ここに「国字」という語を見ることができる。

本朝文字、白雉年間（650～665）儒臣奉勅所『新字』四十四巻。其書泯焉。俗間所用、亦有漢人所不載者。蓋是国字。世儒、概以為譌、非通論。今、定以為国字。

本朝の文字、白雉年間に儒臣の奉勅して撰する所の『新字』四十四巻あり。其の書は泯（ほろ）びぬ。俗間に用ふる所、亦た漢人の載せざる所の者有り。蓋し是れ国字ならん。世儒、概ね以て譌りと為すは、通論に非ず。今、定めて以て国字と為す。

日本人は、かなり早い時期に中国では用いられていない日本独自の「国字」を考え出し、それを用いていたようである。

さて、日本人は、漢字を利用して独自の漢字を創り出しただけでなく、中国の文学形式である「漢詩」をも一つの文学表現のジャンルとして取り込み、日本人の手になる多くの「日本漢詩」を生み出した。以下、日本人の作った所謂「日本漢詩」について概観する。

## 三　日本漢詩

日本の漢詩は、およそ四期に分けることができる。

第一期は奈良・平安時代であり、主な作者は当時の貴族である。自らの思いを詠うというよりも、様々な儀式の際に詠われたものが殆どである。

第二期は鎌倉・室町時代。その主な作者が五山の僧侶達であったために「五山文学」とも称される。作者である僧侶の中には中国に留学した者も多くいて、前代の詩に比べて飛躍的に詩の内容が充実している。

第三期は江戸時代である。日本漢詩の歴史の中で、隆盛を極めた時期といえる。幕府の昌平黌をはじめとする各地の藩校を中心に多くの詩人が輩出された。

第四期は明治以降である。イギリス文学の影響を強く受けた夏目漱石、ドイツ文学の影響を強く受けた森鴎外などの文人も、その根底には中国文学の素養があった。多くの文人は漢文で日記を付け、漢詩を自由に作っていたのである。

以下、それぞれの時期を代表する詩を紹介しよう。

### ①第一期（奈良・平安時代）

初めに、大友皇子（684～672）の「侍宴」という詩を紹介しよう。

侍宴（宴に侍す）
皇明光日月　皇明 日月と光き
帝徳載天地　帝徳 天地と載す
三才並泰昌　三才 並びに泰昌
万国表臣義　万国 臣義を表す

この詩は、我が国最初の漢詩集である『懐風藻』の巻頭に置かれる詩である。天智天皇の六年（667）三月に近江遷都が行われ、翌年の正月三日に即位の礼が行われた。この詩は、即位礼の後の饗宴で詠まれたものと言われている。現存する日本最古の漢詩である此の詩には、『中庸』の語句が多用され、まだ模倣の域を出ない作品といえる。

次に真言宗の開祖である空海（774～835）の詩を見てみよう。

後夜聞仏法僧鳥（後夜 仏法僧鳥を聞く）

閑林独坐草堂暁　　閑林独坐す 草堂の暁
三宝之声聞一鳥　　三宝の声 一鳥に聞く
一鳥有声人有心　　一鳥 声有り 人 心有り
声心雲水倶了了　　声心 雲水 倶に了了

『性霊集』巻十に収めるこの詩は、空海が高野山において暁に鳴く仏法僧の声を聞いて作ったものである。仏法僧という鳥は、その鳴き声が「仏・法・僧」と聞こえ、「このはずく」の一種である。この仏宝・法宝・僧宝を「三宝」という。三宝を尊べという仏の教えを仏法僧の泣き声に聞いたというのである。

次に此の時期を代表する菅原道真（845～903）の詩「不出門」を見てみよう。

不出門（門を出でず）

一従謫落就柴荊　　一たび謫落せられて 柴荊に就きし従り
万死兢兢跼蹐情　　万死 兢兢たり 跼蹐の情
都府楼纔看瓦色　　都府楼は纔（わづ）かに 瓦の色を看
観音寺只聴鐘声　　観音寺は只（た）だ 鐘の声を聴くのみ
中懐好逐孤雲去　　中懐は好し逐はん 孤雲の去るを
外物相逢満月迎　　外物は相ひ逢ふ 満月の迎ふるに
此地雖身無検繫　　此の地 身に検繫無しと雖も
何為寸歩出門行　　何為れぞ寸歩も 門を出でて行かん

時に道真は、藤原時平の讒言にあって太宰府に左遷された。此の詩で道真は、太宰府に流された後、ひたすら謹慎につとめる様を歌っている。そもそも菅原家は都にあって学者の家柄として高名であった。因みに道真の祖父清公は、空海や最澄らと倶に遣唐使として唐に赴いている。

**②第二期（鎌倉・室町時代）**

先にも述べたように此の時期は、その詩の作者が主に五山の僧侶たちであったことから「五山文学」と称されている。次に此の時期の代表的な作者である義堂周信と絶海中津の作品を見てみよう。

竹雀

風枝栖不穏　　風枝 栖 穏やかならず
露葉夢応寒　　露葉 夢 応(まさ)に寒かるべし
莫近高堂宿　　高堂に近づきて宿する莫かれ
公孫挟弾丸　　公孫 弾丸を挟めば

義堂周信（1325～1389）は、臨済宗京都南禅寺の僧である。風に揺れる枝の栖は不安定であるし、露に濡れた葉も寒かろうが、うっかり油断して立派な家の近くに巣を作ると、無慈悲な貴公子たちに打ち落とされるぞ、と雀に呼びかける内容であるが、そこにはむやみに権勢に近づいてはならぬ、という禅僧としての思いが込められているようである。

雨後登楼（雨後 楼に登る）

一天過雨洗新秋　　一天の過雨 新秋を洗ふ
携友同登江上楼　　友を携へて同(とも)に登る 江上の楼
欲写仲宣千古恨　　写さんと欲す 仲宣 千古の恨み
断烟疎樹不堪愁　　断烟 疎樹 愁ひに堪へず

この詩を作った絶海中津（1336～1405）は、京都相国寺の僧である。第三句に見える「仲宣」とは建安七子の一人である魏の王粲（177～217）のことである。王粲は若くしてその才を蔡邕に認められたが、十七歳の頃に長安の乱を避けて荊州の劉表の下に身を寄せた。しかし、風采はあがらず不遇をかこっていた。その頃に作られたとされるのが「登楼の賦」である。初秋に友人とともに高楼に登った。その時に王粲のことに思いが到って作ったのがこの詩である。

**③第三期（江戸時代）**

第三期は、江戸時代であり、日本漢詩はこの時期に全盛期を迎える。第二期の漢詩が多く五山の僧侶の手に成るものであれば、この時期の漢詩は儒者によって作られたものとも言える。ここでは、この時期を代表する詩人の詩を幾つか紹介したい。

江戸時代には多くの藩校や私塾が作られたが、豊後日田（大分県）咸宜園の初代の塾主は広瀬淡窓（1782～1856）であった。淡窓は漢詩を作るのがうまく、西海の詩聖と称された。彼が、異境の地にあって苦楽を共にして学ぶ塾生を詠んだ詩が次に挙げる「桂林荘雑詠、示書生」である。

桂林荘雑詠、示書生（桂林荘雑詠、書生に示す）

休道他郷多苦辛　　道ふを休(や)めよ 他郷 苦辛多しと

同袍有友自相親　　同袍 友有り 自ら相親しむ
柴扉暁出霜如雪　　柴扉 暁に出づれば 霜は雪の如し
君汲川流我拾薪　　君は川流を汲め 我は薪を拾はん

「同袍」の語は、『詩経』秦風・無衣に「豈曰無衣、与子同袍」（豈に衣無しと曰はんや、子と袍を同にせん）とあるのに拠る。詩吟の祖を広瀬淡窓とするのは、その咸宜園で大いに詩が吟じられたことに由来するのであろう。

次に広島にも縁の深い菅茶山（1748～1827）と、その弟子であった頼山陽（1780～1832）の詩を紹介しよう。

冬夜読書
雪擁山堂樹影深　　雪は山堂を擁して 樹影深し
檐鈴不動夜沈沈　　檐鈴動かず 夜沈沈
閑収乱帙思疑義　　閑かに乱帙を収めて 疑義を思ふ
一穂青灯万古心　　一穂の青灯 万古の心

冬の夜の読書を詠じた詩である。「しんしんと更けてゆく夜に、これまで読んで取り散らかしていた書物を帙にしまいながら、なお疑問に思っていたことを考えていると、稲穂のごとき青白い灯火が、古の聖賢の心を照らしてくれる」という。読書によって、時に書を著した古の聖賢の心が分かることがある。これこそが読書の楽しみなのである。

月下独酌
旧友不知衰老日　　旧友は知らず 衰老の日
新交何識少年時　　新交は何ぞ識らん 少年の時
孤斟対月傷今昔　　孤斟 月に対して 今昔を傷めば
影落愁人掌上巵　　影は落つ愁人 掌上の巵に

言うまでもなく「月下独酌」は盛唐の詩人李白の同題の詩を意識してのものである。この詩を作った時、茶山は七十五歳であった。

次の詩は、茶山の弟子であった頼山陽（1781～1832）の詩である。

阿嵎根
危礁乱立大濤間　　危礁 乱立す 大濤の間

決眥西南不見山　　眥を決すれば 西南 山を見ず
鶻影低迷帆影没　　鶻影は低迷し 帆影は没す
天連水処是台湾　　天 水に連なる処 是れ台湾

此の詩は山陽が三十八歳の時、九州に旅をした際のものである。「阿嵎根」は、今の鹿児島市の西北に位置する阿久根市。「はやぶさが海面近くを旋回し、船の帆影は水平線の彼方に消えてしまった。天と水とが連なっている処、あの辺りが台湾であろう」と詠う後半の二句は、蘇東坡の「澄邁駅通潮閣」二首（其二）「余生欲老海南村、帝遣巫陽招我魂。杳杳天低鶻沒處、青山一髪是中原」の後半の二句を踏まえている。

泊天草洋（天草洋に泊す）
雲耶山耶呉耶越　　雲か山か呉か越か
水天髣髴青一髪　　水天 髣髴 青一髪
万里泊舟天草洋　　万里 舟を泊す 天草の洋
煙横篷窓日漸没　　煙は篷窓に横たはり 日は漸く没す
瞥見大魚波間跳　　瞥見す大魚の波間に跳るを
太白当船明似月　　太白 船に当たって 明 月に似たり

此の詩も前の「阿嵎根」詩と同じく三十八歳の時の九州行の際に詠んだものである。天草灘に船泊した時に、夕暮れの壮大な景色を詠った内容であるが、此の詩の初めの二句も、やはり蘇東坡の「澄邁駅通潮閣」詩を踏まえている。

鎖国時代の江戸期においては、恐らく文人達は、中国に留学に行った五山の僧侶達が中国語を十分に理解しているのとは違い、中国語ではなく、漢文訓読という翻訳法によって漢詩をも自由に作ることができたものと思われる。

**④第四期（明治以降）**

次に第四期、すなわち明治維新後の漢詩として、先ずは正岡子規の漢詩を取り上げてみたい。

正岡子規は、慶応三年（1867）に愛媛県松山に生まれた。本名は常規、幼名を処之助、また升といった。祖父の大原観山に漢学を学びながら小学校を終え、明治十三年（1880）松山中学に進学した。明治十六年に松山中学を退学して上京し、翌年に大学予備門に入学、文学や哲学への関心を高め、詩歌や俳句を始めた。夏目漱石に出会ったのもこの時期のことである。明治二十三年（1890）東京帝国大学国文科に入学。明治二十五年六月から『獺祭書屋俳話』を『日本』に連載、俳句革新の口火を切った。この年、大学の学年試験に落第し、大学を退学、十二月に「日本」社

に入社した。この年以降、句作が急増する。

明治二十八年、日清戦争に従軍記者として赴いたが、その帰途に喀血し、以後は長い病床生活に入る。明治三十一年二月に『歌よみに与ふる書』を発表し、短歌革新に着手した。『古今集』を否定して、『万葉集』や源実朝を称揚し、根岸短歌会を結成。俳句・短歌に並んで、文章革新運動を起こし、写生文を提唱した。脊椎カリエスに悩まされながら、病床にあって『墨汁一滴』『病床六尺』『仰臥漫録』などを発表した。

明治三十五年 (1902) 九月十九日、絶筆三句を残し、三十六歳の生涯を終えた。

次に挙げる詩は、子規が初めて作った漢詩である。

聞子規（子規を聞く）

一声孤月下　　一声 孤月の下
啼血不堪聞　　啼血 聞くに堪へず
夜半空欹枕　　夜半 空しく 枕を欹(そばだ)つ
古郷万里雲　　古郷 万里の雲

自注に「余作詩以此為始」（余の作詩は此れを以て始めと為す）とあるように、子規の初めての漢詩作品であるが、次に挙げる資料から、この詩は子規が十二歳の時に作られたものであることが分かる。

『筆まかせ』（明治二十一年）

余は幼時より何故か詩歌を好むの傾向を現はしたり。余が八・九歳の頃、外祖父観山翁のもとへ素読に行きたり。其頃の事なりけん。ある朝玄関をはいりしに其のほとりに二・三人の塾生が机をならべゐしうちに、一人が一の帳面を持ち、其中には墨で字を書き其間に朱にて字を書きたるを見たり。それは何にやと問へば詩なりといふ。余は固より朱字の何物たるを知るよしもなく詩はどんなものとも知らず。ただ其朱墨相交るを見て綺麗と思ひしなるべし。早く年取りて詩を作る様になりたしと思へり。

其後、観山翁は間もなく物故せられしが、ひきつづきて土屋休明先生の処へ素読に行きしかば、終に此先生につきて詩を作るの法、即ち幼学便覧を携へ行きて平仄のならべかたを習ひしは明治十一年の夏にて、それより五言絶句を毎日一つづつ作りて見てもらひたり。

子規はその生涯において、およそ二千首の漢詩を作っている。以下その中から「送夏目漱石之伊豫」と「厳嶋」の二首を紹介しよう。

子規の友人の夏目漱石が教師となって松山に赴任するに際して贈った詩が、次の詩である。

送夏目漱石之伊豫（夏目漱石の伊豫に之くを送る）

去矣三千里　　去(ゆ)けよ 三千里
送君生暮寒　　君を送れば 暮寒生ず
空中懸大嶽　　空中に大嶽懸かり
海末起長瀾　　海末に長瀾起こる
僻地交遊少　　僻地 交遊少(まれ)に
狡児教化難　　狡児 教化難からん
清明期再会　　清明 再会を期す
莫後晩花残　　晩花の残(そこな)はるるに後るること莫かれ

この詩では次に挙げる『荘子』逍遙遊篇を典故として用い、これから伊豫に赴任していく漱石に対する思いを述べた内容となっている。

北冥有魚。其名為鯤。鯤之大、不知其幾千里也。化而為鳥。其名為鵬。鵬之背、不知其幾千里也。怒而飛、其翼若垂天之雲。是鳥也、海運、則将徙於南冥。南冥者、天池也。斉諧者、志怪者也。諧之言曰、「鵬之徙於南冥也、水撃三千里、摶扶揺而上者九萬里。去以六月息者也。

北冥に魚有り。其の名を鯤と為す。鯤の大いさ、其の幾千里なるかを知らざるなり。化して鳥と為る。其の名を鵬と為す。鵬の背は、其の幾千里なるかを知らざるなり。怒して飛べば、其の翼は垂天の雲の若し。是の鳥や、海運れば、則ち将に南冥に徙らんとす。南冥とは、天池なり。斉諧なる者は、怪を志る者なり。諧の言に曰く、「鵬の南冥に徙るや、水に撃つこと三千里、扶揺を摶ちて上ること九萬里。去りて六月を以て息する者なり」と。

この詩に対して漱石は、次の次韻詩、つまり子規が用いた韻字と同じ韻字「寒・瀾・難・残」を用いて作った詩を返している。

無題

海南千里遠　　海南 千里遠く
欲別暮天寒　　別れんと欲して暮天寒し
鉄笛吹紅雪　　鉄笛 紅雪を吹き
火輪沸紫瀾　　火輪 紫瀾を沸かす
為君憂国易　　君の為に国を憂ふるは易く
作客到家難　　客と作(な)りて家に到るは難し
三十巽還坎　　三十 巽にして還(ま)た坎

功名夢半残　　功名 夢半ば残す

次韻詩を作ることは、かなりの作詩能力が要求されるが、漱石は巧みに子規に対して次韻の詩を作って返したのである。

次の詩は広島に縁のある厳島を、子規が詠ったものである。

厳嶋

海中起宮殿　　海中に 宮殿起こる
非是蜃気楼　　是れ蜃気楼に非ず
名曰厳嶋社　　名づけて厳嶋社と曰ふ
遠矣所来由　　遠きかな来由する所
毛公曾用武　　毛公 曾て武を用ひ
一挙復君讎　　一挙 君の讎を復す
特筆記義戦　　特筆して 義戦を記すも
寂莫三百秋　　寂莫たり 三百秋
借問人不知　　借問するも 人は知らず
往事何処求　　往事 何れの処にか求めん
城塞皆已非　　城塞 皆已に非(な)きも
山高海長流　　山は高く海は長(とこし)へに流る

終わりの二句「城棄皆已非、山高海長流」は、盛唐の詩人杜甫の「春望」詩にある、

国破山河在　　国破れて山河在り
城春草木深　　城春にして草木深し

を典拠としている。

## 四　まとめ－表現形式としての漢詩

ここでは広島に関する漢詩として、土屋久泰（1887～1958）の「原爆行」を紹介したい。土屋久泰は、字は子健、竹雨と号した。1945年８月６日、午前８時15分に、広島の上空で一発の原子爆弾が炸裂した。その時の惨状を土屋は漢詩という形式をもって表現したのである。

原爆行

怪光一綫下蒼旻　　怪光 一綫　蒼旻(さうびん)より下る
忽然地震天日昏　　忽然 地震ひて　天日昏(くら)し
一刹那間陵谷変　　一刹那の間　陵谷変じ
城市台榭帰灰塵　　城市 台榭　灰塵に帰す
此日死者三十万　　此の日 死する者　三十万
生者被創悲且呻　　生ける者は創を被り 悲しみ且つ呻(うめ)く
死生茫茫不可識　　死生 茫茫として　識るべからず
妻求其夫児覓親　　妻は其の夫を求め　児(こ)は親を覓(もと)む
阿鼻叫喚動天地　　阿鼻叫喚　天地を動かす
陌頭血流屍横陳　　陌頭 血流れて　屍(しかばね)横陳す
殉難殞命非戦士　　難に殉じ命を殞(おと)すは　戦士に非ず
被害総是無辜民　　害を被るは総(すべ)て是(こ)れ無辜の民
広陵惨禍未曾有　　広陵の惨禍　未だ曾て有らず
胡軍更襲崎陽津　　胡軍 更に襲ふ　崎陽の津
二都荒涼鶏犬尽　　二都 荒涼　鶏犬尽き
壊牆墜瓦不見人　　壊牆 墜瓦　人を見ず
如是残虐天所怒　　是(かく)の如き残虐　天の怒る所
驕暴更過狼虎秦　　驕暴 更に過ぐ　狼虎の秦
君不聞啾啾鬼哭夜達旦　　君聞かずや 啾啾として鬼(き)哭し 夜は旦(あした)に達し
残郭雨暗飛青燐　　残郭 雨暗くして　青燐飛ぶを

怪しげな光がぴかっと一すじ天から下り、忽ち大地が揺れ動き空の太陽も真っ暗になった。
一瞬にして岡も谷もその姿を変え、市街の建物も灰燼に帰してしまった。
この日に死んだ者は三十万、生き残った者は傷を負って悲しみ呻いている。
誰が死んで誰が生き残ったのかさっぱり分からず、妻はその夫を捜し求め子は親を求めている。
阿鼻叫喚の惨状は天地をも動かすほどであり、町中には血が流れ死骸が幾つも横たわっている。
この災難によって命を落としたのは兵士ではなく、害を被ったのはすべて無辜の民である。
広島の惨禍は有史以来かつて無いものであるのに、米軍は更に長崎の港を攻撃した。
こうして二つの都市は荒れ果ててしまい鶏や犬までも死に絶え、壊れた垣や落ちた屋根瓦だけであって人影を見ることもない。
こうした残虐きわまる行為は天の神の怒るところであり、その兇暴さは虎狼のごとき秦よりもひどいものである。

みなさんも耳にしているであろう、未だに亡霊は啾々と夜から明け方まで哭き声をあげ、破壊された町に雨が降る日には青白い鬼火が飛んでいることを。

かつて此の詩は、広島市の原爆記念資料館の入口の正面の壁に記されていた。この詩を目にした多くの参観者は、この漢詩から原爆の悲惨さを自らのことのように受け止めた。この漢詩は参観者の心に突き刺さるかのようであった。

さて、原爆の悲惨さは、様々な形で表現されている。例えば次に挙げるのは、峠三吉（1917～1963）の自らの体験にもとづく詩集『原爆詩集』の序である。

ちちをかえせ　ははをかえせ
としよりをかえせ
こどもをかえせ

わたしをかえせ　わたしにつながる
にんげんをかえせ

にんげんの　にんげんのよのあるかぎり
くずれぬへいわをへいわをかえせ
（峠三吉『原爆詩集』序）

それぞれの作品からは作者が詩に込めた思いが伝わってくる。日本人は、中国の文学形式の一つであった漢詩というものを、初めは形式的に模倣し、やがてその表現形式を用いて自らの思いを自由に語ることができるようになった。

日本には、和歌や俳句など独自の文学形式があるが、漢詩という形式も、すでにこうした日本の独自の文学形式の一つとなっているようである。そうして漢詩という形式を用いた場合、和歌や俳句では表出できない作者の思い、ある意味で直截的な趣きを表現することも可能であるように思われる。

# Introductory Research on Japanese Kanshi Poetry

Toshiyuki SATO

**Key words: kanshi (Chinese poetry)**

Since Japan is part of the Sinographic cultural sphere, it has been strongly influenced by China since ancient times. The Chinese influence is pronounced in Japanese literature as well. While the Japanese employed “kanji” (Chinese characters) to develop their own unique “kokuji” (national characters), they also appropriated the form of “Chinese poetry” as a genre of literary expression. This resulted in Japan producing a wealth of Japanese “kanshi” (Chinese poetry). In this paper, I examine the so-called “Japanese kanshi” written by Japanese authors and provide an overview of its production in each time period. I also hope to examine kanshi that have taken the atomic bomb as their subject. In so doing, I hope to present an original “kanshi worldview” created by Japanese authors.